

斯經禪師の茶道觀

柴 山 全 慶

は し が き

先年思ひがけなく白隱門下の俊足、斯經禪師の撰述にかゝる「略茶事訣」なる文章に接する好運に恵まれてより以來、常にその特色ある茶道觀に心を引かれてゐたのであるが、深く省る機會を得ないまゝ今日に及んで來た。従つて今回本誌特輯號の企てに際し、早急にこれを問題としたものの十分を盡し得る暇なく、寔に意有つて句到らざる憾みが深く、諸賢の御寛恕と叱正を俟たねばならぬ次第である。

尙「略茶事訣」によつて斯經禪師の茶道觀を考察すると共に、「禪茶錄」による寂庵宗澤（禪茶錄は利休居士の孫宗旦の作とする一説もあるが）の茶道觀、「茶亭之記」による澤庵宗彭の茶道觀、「茶事十六條」による清巖宗渭の茶道觀、「碧巖第四十八則の評語」による東嶺圓慈の茶道觀等を比較することは、有名な禪的茶道觀として茶道文化の精神的根據を見る上に興趣ある問題であると思ふ。然しこゝでは單に「略茶事訣」を中心として斯經禪師の茶道觀についてのみ略述するに留めたい。

禪につながる日本文化の中の特色ある代表として、第一に茶道を擧げることは何人も躊躇しない所であらう。而もこの日本茶道なるものが、同様に禪と深い交渉を持ちながら、支那のそれと著しくその性格と内容を異にすることも亦

「一味清淨、法喜禪悅、趙州是知己、陸羽豈得到其佳境耶」(珠光問答)

「大凡唐賢諸公の茶茗を賞せられしを見侍るに、閣中の清興養生の要術にして、我朝の内には清淨禪味に耽り、外には禮讓質朴を宗として、生を養ひ情をのべ日用世間の益有にしかず」(源流茶話)等の記述を假る迄もなく已に遍く人の知る所である。日本の茶道こそは確かに禪によつて育まれ、禪的境地を根幹として形成された、國民文化の一體系と云ふべきであらう。

今日市井に隆盛を謳はれてゐる茶道なるものは、殆んど先哲達の口を極めて誠められた、茶道の眞精神を失つた邪道の茶儀、又は「妄想の茶道」(斯經禪師の言葉による)に墮落し去つてゐる感を深くするものではあるが、然もなほ「禪的なるもの」の餘韻を留めて、日本人の傳統的性情に契合する何物かを與へつゝあるのが動かし難い事實である。況んや眞の日本茶道に於て禪的精神を外にして、それが如何に簡素・風流・閑寂・清雅・清脫等の諸要素を具備するとしても、も早や生命を缺く空虚さを感じしめずにはゐないであらう。否、日本に於ては、簡素と云ひ風流と云ひ逸脱といふ

茶道を表詮する言葉そのものの中に、已に「禪的なるもの」をくりない傳統的性情得切離し全あると云ふべきであらう。

とは云へ禪がそのまゝ茶道たり得る筈はない。

茶道はどこ迄も茶道たり得る文化的特質と形式とを具備するものでなければならぬ。吾々日本人にとつて、日常生活に即した哲學であり宗教であり道德であると同時に、立派な藝術でなければならぬ。岡倉氏をして「一種の審美的宗教」(茶の本)と定義づけしめたのはそのためである。禪的精神を基調とする中に、何處か吾々の心を通じ耳や目を通じて、性情を樂しましめる寂びた美があり、詩が潜んでゐる形式が整つてゐなければならぬ。

故に古來優れたる茶人は深く禪心を味得し來つて自己の茶道を精練し、常に生命に直接する生活態度を忘れない、宗教的藝術家であつたと同時に、茶に造詣ある禪匠達が、深く茶道に徹してその禪觀より、卓越せる茶道觀を示されてゐることも、最も相應しい現象であると思ふ。利休居士が「趙州を亭主にし初祖大師を客にして、休居士と此坊(南坊宗啓のこと)が露地の塵を拂ふ程ならば一會は調ふべきか」と云へる言葉は、眞の禪者の受用底が、その儘眞の茶人の舉手投足と、その精神的立場を一にすることより見るべきであつて、必ずしも形式的茶道の達人であることを意味するものではないと思ふ。

斯經禪師は確かにある意味の大茶人の一人であり、その「略茶事訣」は、吾々に優れたる禪的
茶道觀を示すものとして寔に價値の高いものと思ふ。

二

斯經禪師は諱を惠梁と云ひ履霜軒とも號せられた。

「享保七年(皇紀、二三八三)播州姫路の産、姓は菅氏、幼にして穎異、十歳にして京師に上り、經史を
讀みてよくその義に通ず」とその傳にあるよりすれば、已にその少年時代より英俊の萌しを露はし
てゐたものと思はれる。

十二歳の時花園海福院東明和尚の室に入り祝髮して僧籍に入られたのであるが、行業頗る純真で
あつた。十七歳の時始めて游方、豊後少林寺の寒巖和尚に隨從し、辛酸六年に及びその遷化に逢ふ
や、轉じて巨聖白隱禪師の室に投じ、苦修遂ひに玄關を打破せられた。後辭して京洛に歸り本師東
明和尚の心印を受けて妙心第一座に居り、海福院に住せられたのは三十七歳の時(寶曆七年、二四一七)
であつた。

爾來江湖の雲衲道を詢ふもの尠からず、近衛内前公その道望を聞き、時に召見せられ時に自から
駕を枉げて親しく參問せられ、大覺門主寛深殿下も亦自から駕を枉げ、しばしば法要を問ひ給ふ等
京師浪花の道俗ら、師の道德に歸依する者勝て數ふべからずと云ふ有様であつた。後、「願心道場

旨趣」を撰文し、諸方の扶を得て洛南八幡に江湖道場雄徳山圓福寺を創設し、四衆益々その徳に靡く有様であつた。

天明六年秋微疾を示し、翌七年正月二十三日、皇紀二四四七、早晨自から面を洗ひ、筆を求めて

薪火滅時和灰烟 無聲三昧自現前

如是往來如是住 畫梅薰徹四禪天

と遺偈を書し、筆を抛つて坐脱せられた。春秋六十六。寂後二十七年（文化十二年、皇紀二四七四）光格天皇より禪師號御下賜あり、「扶宗大綱禪師」と云ふ。寔に白隱門下四天王の名に恥ぢぬ碩徳であつた。

故に禪師一代の道譽頗る高く、時の顯紳は本よりのこと、學者茶人等の歸依するもの多く、從つて茶道に關する造詣自から深きものあり、茶道の時弊を歎じ

「今時茶を習ふ人を見るに、事サノ作法に密なることは古へよりも却て勝れたる程なれども、茶理には愈々遠ざかりて達すること能はず、妄想の茶の湯と云ふべし（中略）余故に茶理を推し尊み、茶道の實を失はざらしめんことを要し云々」（略茶事訣後序）

とて「略茶事訣」を撰述し、見性の眼を具する眞の茶禪一味の境を主張せらるゝ婆心を餘儀なくせられたのも、禪師の道眼にして寔に當然のことと云はねばならぬ。

三

斯經禪師が海福院出世より社會的活動を續けられし約三十年間は、略十代將軍家治の治世と見ることが出来る。將軍家治の時代は、徳川幕府の中興吉宗の「享保の治」の後を受けて幕政漸く紊亂し、その威信の失墜と共に尊王論を稱ふる者漸く擡頭し來つた時代であつて、山縣大貳、藤井右門がために幕吏に處刑せらるゝが如き事件を生じ、安逸の底に何物か來るべき時代の胎動を感じ初めた時であつた。

禪界にあつては、曹洞に面山和尚出で、宗風を揚げ、臨濟に白隱禪師出で、累卵の法灯再び四海に輝き、禪風漸く清新の氣に溢れる時代であつた。

五百年間出を自負する白隱禪師の如きは、

「見性の外に成佛なく、見性の外に淨土なきことを」

「若人不見性探經卷、訪師友、作種々行業、總是妄情所爲」

とて、看話禪の新しき組織の確立と共に「見性」を根據とするに非れば、一切の事象一切の行業盡く虛妄とする禪風を頻に擧揚せられたのであつた。

白隱門下の俊足として聞ゆる斯經禪師の如きも、かゝる氣魄に満ちたる宗風を擔荷して、三十年の法輪を京洛浪花の間に轉じられた事は自然であつて、その「略茶事訣」に現れた茶道觀の如きも亦かゝる宗風擧揚の一面面と見らるゝものであり、「見性中心」の茶道觀たるところに白隱禪的風

格を持つ特徴を知ることが出来る。

殊に當時の茶道界の現状は、利休の孫宗旦を起點として分れた三千家の茶匠達が、已に八代目九代目を數へる時代であつて、それぞれ地方の大名に召し抱へられ、その庇護の下に家系と傳統に安逸を重ね、内的精神の迫力を失ひ、茶道は一種の遊藝化し、僅かに已成的因襲的惰力を無批判に續けるに過ぎず、他面漸く經濟的に築き上げられたる町人達の社會的地位は、却つて茶道を益々俗化せしめ、奢りと社交に佗を忘れる有様であつて、宗教的修道的簡素清純の魅力は、唯枯渴の一路を進みつゝある時代であつた。

斯經禪師が「略茶事訣」の後序に

「余前年來茶事を信ぜず、茶人の様子を見て甚だ笑ふべき事に思へり。」

とある言葉は、確かに當時の茶道界の情勢を窺ふに足ると思ふ。禪師は更に語を續けて

「後來風興通處あり(後來フト通ずる處あり、の意と思ふ)爾來茶道主張の心を生じ、因て茶名ある人々へ縑素を論ぜず遍く探り討ぬるに、能く茶理に達して寂の場を會する底一箇もなし、相承せる口訣のみにて書物なき故すべて亡びたるを知る。」

とあり、茲に禪師の茶道觀確立の企圖を窺ふことが出来ると思ふ。極めて無雜作に見ゆる「フト通する處あり」の一語は、禪匠としての禪師の風格が偲ばるゝと共に、無限の追慕を禁じ得ないもの

がある。

然も禪師は性來「眞風興隆」の念殊の外強く、その「願心道場旨趣」の一文の如き、讀むものをして切々たる護法愛宗の眞情に胸を打たるゝ思ひを生ぜしむるものがある。

「余若年の時、龍翔寺の廢せるを見るについで、偶江湖のために大應の道場興建の願心を發せり。其の子細は時運澆末の故にや佛門の弊風逐日生ず。我家の弊風を救ふ事は、人々脚跟下の事を切に究明せしむるにあり。脚跟下の事を究明せしむることは、單々に坐禪せしむるにあり。單々に坐禪せしむることは江湖の道場を興起するに如くはなかるべし。禪刹建立を企る人は往々にありと雖も師檀共に眞實護法の志願深からざれば禪法流通の道場にあらず、興建に勞すと雖も佛法に補ひなし云々。」(白隱全集)特にこの一節は禪師の性情と眞風興隆の志願の深きを知るに足るものであつて、この眞風興隆は即眞實護法に外ならない。

禪師が「風ト通する處あり」てより主張せらるゝその禪的茶道觀は、禪師にとつて直ちに茶道の眞風興隆であり、正法護持の赤心であつたに相違ない。

「余故に茶理を推し尊み、茶道の實を失せざらしめんことを要し、世の茶を好む人をして普く知らしめんがために、茶事訣を著さんとすれ共未だ果さず、今人の需に應じて記大略如是」と「略茶事訣」の後序を結んでゐられることは、「願心道場旨趣」の文意と思ひ合せて、茶道にま

れ、禪にまれ、兩片なき眞風興隆の赤心より現れたる禪師の面目として、その人間的性情の一面に直接する思ひが深い。

四

斯經禪師の茶道に對する批判は、まづ在來の「茶の四德」より始まる。言ふ迄もなく茶の四德とは「和、敬、清、寂」の四德であつて、殊に利休一派の茶道の根本信條とせられてゐるところである。

元來この「和敬清寂」は、「四箇の格言」として利休の師なる、武野紹鷗の主張にかゝるものとは云はれ、或は又利休の創意による主唱であるとも云はれてゐるのであるが「珠光問答」なる書物に

「將軍義政公召珠光問曰、茶事可得聞耶、光曰、一味清淨、法喜禪悅(中略)其入此室者、外離人我之相、內蓄柔和之德、至交接相見之間、和兮、敬兮、清兮、寂兮、及卒天下泰平也、源公忻然恨逢之晚云々」

とあるよりすれば、その思想は已に珠光にそ 端を發するものと見るべきであらう。(尤もこの「珠光問答」なる書物は、後世の偽作であると云ふ説もあるが) 然しいづれにしても珠光は何等かの形に於て、茶道精神の中心としてかゝる思想に類するものの持ち主であつたと見ることは妥當であると思ふ。

かくてこの思想を傳承し、これを明確にしたるものが紹鷗であり、更にこれを教義的「茶の四德」

として主唱したるものが「佗茶の湯」の完成者たる利休であつたと見るべきであらう。

故にこの四徳を批判することは、日本茶道の根據を批判することであつて、斯經禪師がその茶道觀を已に人口に親しまれた四徳に準據して提唱せられしことは、茶道に關する限り最も自然な道であつたと思ふ。

禪師はまづ「四徳の概念」を述べて

「私とは賓主和樂順從の義なり。敬とは進退揖讓禮度ある義なり。清とは事々徹底清淨ならしむるの義なり。寂とは寂靜にして吾力眞を完ふするの義なり。」

と示されてゐるのであるが、前三徳に對する定義づけは云ふ迄もなく萬人はゞ異を生じ難き性質のもの。然るに第四の「寂」に至つて俄然禪師の眞面目を呈露せられた趣きを見る。

「我が力眞を完ふするの義也。」

實に大膽卒直、一切を肚裏に吞了し盡した境地より湧出する前人未到の創意が窺ひ得られると思ふ。禪師は四徳の中の「寂」の一境に茶道の眞諦を點眼し、茶をして道徳以上、藝術以上のものたらしめ、禪生活と一如たる根據を明確にこゝに主張せられたのであつた。

一般の茶人達が「寂」の境地を單なる靜寂と見、或は「わび」「さび」に通ずる「閑寂なるよろこび、乃至はさびたる美はしさ」と見る等、一般常識を出で得ざる茶道觀に低徊する時、禪師の積極

自由の創意は、寔に死蛇を弄して活龍と爲すの感を抱かしむるものがあるではないか。

「寂とは寂滅爲樂であり、従つて法喜禪悦と同義語となる」とて珠光問答に結びつけ、茶祖珠光は「寂」の境地を「法喜禪悦」と見しものなり、とする説の如きは、教義的説明的であるに過ぎず「我が力眞を完ふするの義」と深く自己の胸中より流出する一語に及ぶべくもなく、常套的にして何處となく氣魄を缺く感が深い。

禪師は婆心更に「寂」の一徳を詳説して

「和敬清の三徳は衆人の共に知り通じて能くする所なれども、唯寂の場は、禪林より相傳せる口訣故傳はらず、亦能くし難き緊要の處なり。此の場は室内にて參取すべき密傳の旨なれども、今略して大意を説破せば、心をして正念に安住すること虚空の如く無所依ならしむることなり、無所依ならしむるとは何の仔細もなく、一點の思想を構へず、些の道理を挾まず、無心無造作に茶事を講ずるなり。此れ即ち我が力眞を完ふするの場なり。」

茲に至つて禪師の茶道觀は「見性」による禪の穩坐地と寸分の差異なきことを見る。然もその内容とする端的は實參實究すべき室内の密傳底として、言詮不及なるを第一とせられてゐるが、密傳底とは云ふ迄もなく自悟自得底のことに外ならぬ。

田中仙樵氏はその茶禪同一味の中に、澤庵禪師の「不動智神妙錄」の境地が茶道の眞精神に通ず

るものとして、これを茶人某に與ふる書の形式にかへて載せてゐると云はれてゐるが（茶道全集、茶説茶史篇）特に「應無所住而生其心」の章の如き

「此の文を読み候へば、オウムシヨジウ、ニシヨウゴシンと讀み候、萬の業をするに、せうと思ふ心が生ずれば、其する事に心が止るなり。然る間止る所なくして心を生ずべしとなり。（中略）舞を舞へば手に扇を取り足を踏む、其手足をよくせむ、舞を能くせむと思ひて忘れ切らねば、上手とは申されず候。未だ手足に心止らば、業は面白かるまじ。悉く皆心を捨て切らずしてする所作は皆惡敷候。」

澤庵禪師が柳生但馬守に示された劍禪一味の境は、同時に斯經禪師の

「無所依ならしむるとは何の仔細もなく、一點の思想を構へず、些の道理を挾まず、無心無造作に茶事を講ずるなり。」の茶禪一味觀に符合する。

「應に住するところなき心」は「無心無造作の心」に外ならぬ。然もこの無心無造作は、無作に住まり無心に止まるものでなくて、「而もその心を生ずる」はたらきの契機に外ならぬ。且つ「轉處實能幽」なる立場に「我が眞を完ふする」大肯定の造作三昧・茶三昧は、そのまゝ無作無心として無所依に立つ「何の仔細もなき」世界である。斯經禪師の茶道觀の根據は實にそこにある。而もこの境地を、室内にて參取すべき密旨とし、「見性」の心眼に一切の價値を歸してゐる趣きがある。

即ち禪師は、口に「茶理」を稱しつゝ、「茶」の世界を超えた「理」（此の場合の理は絶対を意味する）として主張し、理即禪、禪即茶の那一境を根據とせられてゐる。

「茶理に通ぜざれば無根本の茶の湯なり。」

「事サノ作法に密なることは古よりも却つて勝れたる程なれ共、茶理には愈々遠ざかりて達すること能はず、妄想の茶の湯と云ふべし。」

と、茶理あるところ禪あり、禪あるところ茶理あり、遂に茶理を茶に求めず「見性」より來る處自から茶理を成就し、「寂」の眞味に徹底するとせられてゐる。禪師によれば、畢竟茶理とは見性の端的に外ならぬ。

「茶祖達の風規を窺ふに、皆茶味禪味一致なることを體得し、大徳の和尙方に參決して造詣の分あり、各々上達の人々なり。」

と斯經禪師はどこ迄も禪中心に茶道の價値を決する外餘念がない。従つて今時の茶に親しむ人々は茶を習つて茶理、即ち禪を顧みず「妄想の茶の湯」に親しむに過ぎず、かゝる茶儀に眞の茶理を傳ふる道理なく「全く指南の道斷えたる故なり」と慨嘆せらるゝ所以である。

かくて禪師は、徹頭徹尾禪心に徹し、一點の思想を構へず些の道理を挟まず、無心無作の三昧を茶理の眞髓とし、主客共にこの三昧に入らば、「本心に住することを得て一切の勞擾を免れ、作法の

手前も自然と穩當見事に出來すべし。(中略)塵中の境内にて暫時ながらも任運無作の用きをなして、冷淡の一味現前すれば、萬劫の飢を消すべき希有の樂みなり。世間最上の風流と云ふべし。」

「最上の風流」とは見性の心眼に通ずる風流の意に外ならぬ。寔に高邁にして而も情味掬すべき茶道觀と云ふべきである。

禪師が利休居士の作とせらるゝ「茶事百首」の中より(此の利休の茶事百首の詠歌は、その内容玉石混淆であつて、自分は別人の挿入作が多いのではないかと考へてゐる。)

「茶の湯とはたゞ湯を沸かし茶をたてゝ飲むばかりなる事と知るべし」

の一首をぬき示し、任運無作、然も我が眞を完ふする「寂」の茶道の眞髓を「と居士の歌へるは此の訣なり」と斷定せられてゐることは實にと肯かれるところである。

「本心に住する」とは無我に徹する(見性することである。無我に徹して初めて、一切の造作が無作の三昧として眞を完ふする生き方となる。「寂」の本據に外ならぬ。見性に立脚する斯經禪師の「寂」には、實はも早や一點の構ふべき思想もなく、些の挟むべき道理もない、「唯湯を沸し茶をたてゝ飲むばかり」に三昧が備つてくる。舉手投足も天真の姿として、自から茶の眞諦に添ふに過ぎぬ。枯淡・簡素とは調度や形式のことではない、物に徹して「眞の顯れてゐる」ことである。茶人の捉はれを淨めて「冷淡の一味」に澄み切ることである。

笑嶺禪師が「古來茶人の見解に非ず、禪法の真味と他事なし」と印可し、その法嗣春屋國師が利休の肖像に「趙州の且坐喫茶底、もし此の翁に非されば知ることを得じ」と賛せられてゐることは、共に自由無作、茶を超えたる茶「規矩寸尺式法等ながらに云ふべからず、火を起し湯を沸し茶を喫する迄の事なり」(南坊錄)に見る、古高清澄「音もなく香もなき」無功の凡茶人に歸れる利休晩年の茶境を指すに外ならぬ。

「茶を喫する迄の事なり」の一語、容易なるが如くして實に「知音少なる」大火聚の如き難透の境地である。茶道のみによつて容易に眞の茶人たり得ざる所以はこゝにある。

あるが儘の現實がその儘佛行となる爲めには、實踐的に一切の現實を否定し盡す心理的過程を條件とせなければならぬ。「自己を運びて萬法を修證するを迷とす、萬法すゝみて自己を修證するは悟なり」(道元禪師)の生活態度は、自己を脱落し盡す過程を先行とする「見性」の上のみ成立する。そこに「山を谷、東を西と茶の湯の法度を破り、物を自由にす」(山上宗二の利休評語)る無作の妙用を受用し、一切はその儘眞として輝く「寂」の眞諦がある。

「凡そ一切の事は理を得て高尚の地に到るべし、此の理を會得して本より割り出して、末々の茶事を修治せば、一々の規矩格別に拘らざれ共道に合はずと云ふことなし、若し和敬清寂の四徳手に入りぬれば、法爾に簡易古雅の趣きを得て、其人柄も大いに勝るべし、是れ苟且の事にあらず、直ち

に大道の奧義に合ふなり。」

とある禪師の「理」とは見性の「道理」に外ならぬ。この「理」に修治せらるゝ茶事は和敬清寂の四徳に展開せらるゝも「寂」の一徳に歸し、任運無作に於て一切を價值づける大道の奧義たることは云ふ迄もない。

禪師は更に蛇足とさへ思はれる婆心の説を敷衍して

「台家の一念三千稱性の行に合ひ、華嚴の一縁起無盡の法門に合ひ、密宗の周遍法界の作法に合ひ維摩の直心是れ道場心淨ければ淨土淨しとの意に合ひ、孔子の吾道一以て貫之可もなく不可もなくの聖表に合ひ、神道の正直清淨の本體に合ひ(中略)然れば茶の一行を如法に行する中に自然に萬行を皆具足すれば、一生の能事底を盡く了畢す。眞の茶人と仰ぐべし。」

と述べられてゐるが、恐らく斯經禪師の「眞風興隆」の熱情に引かれた贅言であると思ふ。禪師の茶道觀の眞髓は却つて「我が力眞を完ふする」の一語につきてゐる。寔に高く評價せらるべき茶人であり「寂」の眞境であり「見性」の徳である。

五

茲に至つて斯經禪師の茶道觀は、澤庵禪師の「貪らず、おごらず、つゝしみておろそかならず、すなほにして眞なるを茶の湯と云ふべし。……天地中和の交を樂しむは茶の湯なるべし。」(茶亭之

なるや、道徳的なる茶道観、清嚴禪師の「この人の心の源甚だ清く偏に陀きつたる用はたらきなれば、その住居もさびて目の付けどころもわびさびたる事どもなり。」（無名茶の湯なる洒脱清雅なる茶道観、大心和尚の「凡そ禪法は總て味のなき様に示すなり。茶道は即ち禪規なるが故に無味を示して眞味を知らしむ」）（無味茶なる枯淡清逸なる茶道観、等々に對比して明かに獨自の地歩を示し、無作・無所依の妙を卒直に主張するにある。

然もその根源を「寂」の一徳に歸し、人々實參して了得すべき密旨なりとし、この了得（見性）こそ一切の根本として一切を生命づける内的力なりと云ひ、内調へば已に茶道の眞諦に徹するが故に「左右源に逢ふ」の妙用を展開し、「一々の規矩格別に拘はらざれ共道に合はすと云ふことなし」とする。寔に見性の心眼だに備はらば茶事のみならず、一切の造作盡く無所依の妙用となる白隱禪的風格をもつ茶道観である。

従つて斯經禪師によれば、師道生活と禪生活とは共に無作・無所依の妙用に立つ文化と宗教との両面に過ぎぬ。故に「妄想の茶の湯」を「寂」に生命づけるものは、たゞ「見性」の「まなこ」であると云へる。又この事は茶道とは別に、禪の文化への寄與に一つの指針を示唆するものとして、後昆の服膺すべき要諦であると思ふ。